

[研究ノート]

# 日本の大学における人間学

—現代人間学考1—

中 野 毅

はじめに

創価大学の文学部が改組され文学部人間学科へと統合されて3年が経過した。その後、本誌においても現代における人間学とは何かという模索が開始されている。

創価大学に奉職して以来、比較文化論や「人間と文化」などの講義を通して、人間を研究する学問的方法や、人間はなぜ文化を有するのか、文化を発達させたのかという課題を考えてきた。その一端を紹介しながら、本学における人間学をどのように考えていくことがよいのか、いくつか試論を述べさせていただきたい。初回の本稿では、人間学または人間科学と称する学部学科の成り立ちと学問の構成、文学部や教養教育との関連などについて整理しておきたいと考える。

## 1. 日本の大学教育における「人間学」の趨勢

「人間学」という呼称が日本の大学における新しい学部または学科の名称として使われ始めたのは、35年以上前にさかのぼる。筆者の知る範囲では、この名称が最初に使われたのは広島大学が1974年に総合科学部 (Faculty of

the Integrated Arts and Sciences) を設立し、この中に人間科学プログラム (Program of Human Sciences) が設けられた際である。次いで、旧東京教育大学が大幅に改編されて設立された筑波大学において、1975年に従来の教育学部が第2学群人間学類として発足し、2007年に教育学類・心理学類・障害科学類の3領域によって構成される人間学群 (School of Human Sciences) となった。1987年には早稲田大学人間科学部 (School of Human Sciences) で学部名として使われ、1992年の京都大学総合人間学部 (Faculty of Integrated Human Studies) の設立によって、日本の大学界における「人間学」「人間科学」の用語と内容がほぼ確定したと言える。近年では、大正大学が2001年に「人間学部人間科学科」を創設し、2005年には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (A A研) において、共同研究プロジェクト「総合人間学の構築」が開始されて、人間とその諸活動を総合的に研究しようという趨勢は高まっていると言える。

この領域における名称は、「人間学」や「人間科学」とされており、後者の方がやや多いようである。英語表記としては前者が Human Studies、後者が Human Sciences が定着しつつある。古典的には Anthropology や Anthropological Studies と表記されたこともあったが、近年ではいわゆる「人類学」を指す英語表記として用いられるようになったため、「人間学」の呼称としては使われていない。

では、「人間学」「人間科学」と称される学部や学科の構成、また学問の内容にはいかなるものが考えられているのだろうか。共通している点は、「科学性」「総合性・学際性」「創造性・実際性」とまとめられる。

(1)「科学性」とは、現代の人間学が人文社会科学および自然科学にわたる「科学的」な人間の研究を目指しているという点である。近年の自然科学における人間に関する諸領域の研究は驚くほどの進展を見せている。遺伝子工学や脳科学などの生命科学や情報科学の発展はよく知られているが、地球や銀河系、宇宙の誕生と発展に関する研究も進み、地球における生物誕生のプロセス、動物からヒトの誕生にいたる進化の過程も大きく解明されてきた。また

宇宙との相関関係も含む地球の環境科学の発展もめざましく、環境問題と人間の生存について大きな警鐘を鳴らしている。人文社会科学においても、考古学や文化人類学における霊長類から人類への進化の研究も大幅に進展し、脳科学と関連した認知心理学や認知言語学など人間文化の形成に関する研究も大きく発展した。

上述の多くの大学における「人間学」「人間科学」は、それらの諸成果を取り入れて、科学的に「人間」の全体像に迫り、また人間集団とその（文化的社会的また自然的）環境との相関関係をめぐる研究と教育をめざすものと位置づけられている。なかには体育学や障害科学を入れるところもある。前述の広島大学が「総合科学」と称しているのも、その考え方の表れであり、「人間学」より「人間科学」という呼称が多く使われていることも、その反映である。

ただ「総合人間学」と称している京都大学では思想・社会・文化の3方面から人間の総体的探求を目指すとして主張し、文学や美術、演劇、映画などの文化的営みの解明を通して人間存在の思想的、倫理的、哲学的な側面を重視する姿勢を打ち出している点は注目すべきであろう。その点は東京外語大学A A研の研究構想も同様である。

(2) 次は「学際性・総合性」である。人間とは動物の一種であるとともに、他の動物には見られない言語や宗教、芸術などの高度の文化的要素を持ち、さらに精神的領域は他の動物にはない広がりや豊かさを備えている。そのような「人間」の研究には単独の学問では迫り得ず、上記の科学的人間研究を含むさまざまな領域を専門とする諸学問による共同作業、共同研究、つまり「学際的研究」(interdisciplinary studies)が必要であり不可欠であるとの共通認識にたっている。

次節で詳述するが、広島大学の大学院総合科学研究科では、人間科学部門として生命科学部研究・人間行動研究・身体運動科学研究・言語研究・人間存在研究の5領域がおかれ、さらに環境科学部門と文明科学部門と連携していく体制となっている。京都大学総合人間学部も思想、社会、文化の3方面か

ら人間の総合的な把握をめざし、人間科学系・認知情報学系・国際文明学系・文化環境学系・自然科学系の5学系から構成されている。私立の大正大学では、複雑化・多様化する社会に生きる人間の行動や心理の理解のために、「人間」「集団・組織」「社会」の3つの視点から社会現象を考察する社会学系と、「身体」「心理」「社会的行動」などの視点から人間を理解しようとする心理学・社会心理学系の、2つの系統の科目を用意した学際学部としている。早稲田大学の人間科学部も「人間の抱える諸問題について学際的に学び、探求する」というスローガンを掲げ、「人間環境科学科」「健康福祉科学科」「人間情報科学科」から構成されている。

また「総合性」とは、人間の研究が上述の学際的という意味での総合的研究であるということにとどまらず、従来の大学教育・研究において欠陥となっていた専門的細分化への反省が込められている。これまでの日本の大学は専門指向型が大半であり、専門分野や学部学科間・講座間の壁が高く、隣接分野への視野を広げる努力は軽視されてきた。それに対し新たな総合科学や人間科学では、核となる専門分野を持ちながらも、それを越えた理系・文系にわたる裾野の広い教育・研究を行う学部や学科を目指すという共通点が見られる。

(3) 第3点は「創造性・実証性」である。これは大学の社会的存在意義とも密接に関係する課題でもある。従来の大学は伝統的または専門的な知識の集積・研究や継承に重きをおく傾向が強かった。これに対し、これからの大学は現代社会や現代世界が直面する様々な課題、地球的問題群などに積極的に取り組むべきであり、そのためには従来の発想法や学問間の壁を破る創造的な学問の発展、応用学の展開が不可欠である。また、その課題解決に意欲的に挑戦する創造的で有為な人材を育成するべきであるとの問題意識に立脚しているからである。

広島大学総合科学部では、次のように謳っている。

現代の高度な科学・技術の発展は、個別の科学研究の細分化をうながす一方、これまでの個別の科学研究の枠組みではとらえきれない社会的

課題を生み出しました。例えば、環境汚染や生態系破壊の問題、また地域紛争・南北格差の問題、さらには高齢化社会の問題等です。これらの問題には、科学的、法律的、政治的、文化的な様々な要因が複雑に絡みあっていて、その解決は容易ではありません。このような複雑・多岐に亘る問題や課題に応えるには、各専門分野の協力による幅広い教育・研究が必要です。

総合科学部では、これまで、言語と文化、人間社会と文明、戦争と平和、国際社会から見た広島の意味、地域開発と環境問題、生命科学、物質科学、情報科学などのテーマについて、総合的な研究がなされています。そして、これらの分野において既に幾多の成果があげられ、有為な人材を社会に送り出しています。

他の諸大学においても表現は異なれ、ほぼ同様の主張がなされている。これは単に実学を重視するということではない。大学とは、過去から現在におよぶ世界の知識・情報や文化の集積所であり、今後もそうで有り続ける必要はある。しかし同時に、それらの蓄積を全面的に活用し、さまざまな問題解決の方法や人材の育成に、政治的、宗教的、経済立場を越えて貢献できるのも大学であるからである。

## 2. 総合人間学の学問構成

近年の日本の諸大学における人間学や人間科学が、どのような理念や構想に基づいて設置されてきたか、その共通点や概要を整理してみた。次に、この領域の学問の構成を、具体例をいくつか引きながら見ておきたい。その際、学部での教育科目の構成を示すとすると複雑で細かい科目群を列挙しなければならないが、学問の構成をどのように考えているかを知る上では、大学院の専攻や講座の配置の方が分かりやすい場合がある。従って、以下、広島大学大学院総合科学研究科と京都大学大学院人間・環境学研究科の学問配置を例示する。次に早稲田大学人間科学部は「人間環境学科」「健康福祉学科」「人

間情報学科」から成るが、そのうち「人間環境学科」の構成を、それぞれのホームページからの情報をもとに、以下に紹介する。さらに詳細な内容は、各大学のホームページなどにアクセスして確認していただきたい。

広島大学大学院総合科学研究科

部門 Division	講座 Section	領域 Field	分野 Specialty	
人間科学 Human Sciences	行動科学 Behavioral Sciences	生命科学研究 Life Sciences	生命科学 Life Sciences 脳科学 Brain Sciences	
		人間行動研究 Studies of Human Behavior	認知行動科学 Cognitive and Behavioral Sciences 人間行動学 Human Behavioral Sciences	
		身体運動科学研究 Sport Sciences	身体運動科学 Sport Sciences	
		人間文化研究 Studies of Human Cultures	言語研究 Language Studies 人間存在研究 Humanities and Science of Art	言語科学 Language Studies Philosophy and Aesthetics
	環境科学 Environmental Sciences	環境自然科学 Environmental and Physical Sciences	自然環境研究 Natural Environmental Sciences	環境生態学 Environmental Ecology 地球表層環境科学 Environmental Earth Sciences
			総合物理研究 Integrated Physical Sciences	複雑系物理学 Physics of Complex Matter 相関系物理学 Physics of Correlated Matter
情報システム研究 Information and Media Sciences			情報システム環境研究 Information and Media Sciences	情報システム環境学 Information and Media Sciences
社会文明研究 Studies of Civilization and Society		社会環境研究 Social Environmental Studies	地域環境論 Studies of Regional Environment 現代社会論 Studies of Modern Society	
			社会文明研究 Studies of Civilization and Society	文明史文化史研究 Cultural History 文化人類学 Cultural Anthropology 社会文化研究 Socio-cultural Studies
文明科学 Cultural Sciences	地域研究 Area Studies	地域研究 Area Studies	広域アジア研究 Asian Studies 広域ヨーロッパ研究 European Studies 英米研究 English/American Studies	

## 京都大学大学院人間・環境学研究 (Graduate School of Human and Environmental Sciences)

共生人間学専攻 Department of Human Coexistence	人間社会論講座 (Course of Human and Socio-Cultural Studies)
	思想文化論講座 (Course of Thought and Culture)
	認知・行動科学講座 (Course of Cognitive and Behavioral Sciences)
	数理科学講座 (Course of Mathematical Science)
	言語科学講座 (Course of Linguistic Science)
共生文明学専攻 Department of Cultural Coexistence	外国語教育論講座 (Course of Foreign Language Acquisition and Education)
	現代文明論講座 (Course of Studies on Contemporary Civilizations)
	比較文明論講座 (Course of Comparative Studies of Civilizations)
	文化・地域環境論講座 (Course of Cultural, Regional and Historic Studies on Environment)
相関環境学専攻 Department of Interdisciplinary Environment	歴史文化社会論講座 (Course of Social Cultural History)
	共生社会環境論講座 (Course of Studies in Symbiotic Socio-Environmental System)
	分子・生命環境論講座 (Course of Molecular Studies on Chemical and Biological Environments)
	自然環境動態論講座 (Course of Dynamics of Natural Environment)
	物質相關論講座 (Course of Studies on Material Science)

## 早稲田大学人間科学部人間環境学科 (Department of Human Behavior and Environmental Sciences)

## 生物・環境系

人間や動植物がどのようなところで生息しているか、また地球上における資源のネットワークなどから環境問題を研究します。神経内分泌学、環境生態学、地球環境科学、環境管理計画学、水域生態学を専門とする先生方が指導に当たります。

## 心理・行動系

家や街、家族、地域コミュニティなどを環境としてとらえ、それぞれの中で心や行動がどう形成され変化していくのか、環境科学の立場から環境への能動的な関わりを研究します。動機づけ心理学、発達行動学、環境心理学、建築人間工学、建築学などを専門とする先生がそろっています。

人間環境科学科は、4つの領域から構成されています。



社会学と人類学の領域から対人環境のさまざまな諸問題を研究していきます。家族社会学、職業社会学、都市社会学、アジア社会学論、社会人類学、人口学、環境社会学を専門とする先生方で構成されています。

## 社会系

考古学や文化、ことばの側面で環境をとらえ、人と人、人と物の関係を考察していきます。フランス文化社会学論、ドイツ地域文化、日本考古学、文化人類学、異文化間教育学という専門分野の先生方のもとの、さまざまなテーマに取り組みます。

## 文化系

これらの事例から分かるように、人間の全体を研究する現代の「人間学」は、自然科学及び社会科学を総動員し、また京都大学などのように文学や芸術、思想、宗教などの人間の精神的営為への深い理解と探求をも含めて、実施されている。また動物としての人間身体の研究、動物の一員でありながら他の動物には見られない独特の身体的特徴、それがもたらす言語活動や宗教的世界の創造などの独特の精神的心理的特徴の研究から、複数の人間が織りなす集団行動とその組織構造、大規模な社会組織や支配機構としての国家などの政治的装置、さらにそれら大規模な社会や国家が織りなす国際的な機構と活動などと幾重にも拡がる同心円的世界システムの探求、近年では国家を越えたグローバル化の動向、そしてグローバルな世界を取り巻く地球環境、さらにその地球を取り囲む宇宙的環境との連関性にまで及んでいる。

### 3. 教養教育と文学部との関係

(1) このような総合学としての人間学・人間科学が日本の大学において発展してきているが、ここで従来の「教養教育」との関連性を考えてみたい。その理由の第一は、近年において「教養教育」の重要性が再び強調されるようになり、リベラル・アーツ学群などを設立する大学も出現し、創価大学においても教養教育の重要性が強調されているからである。第二には、「教養教育」の重要性が戦後の日本で主張されたことは、第二次大戦後の大学改革で教養学部や教養部の設立が盛んに行われた時期にもあったが、その段階で、上述の「総合性」や「創造性」という理念もすでに語られていたからである。第三には、本学も含めて、現在の日本の大学における「文学部」には、「教養」教育と、上記のような「専門的」な文系領域の研究という二つの要素が結合していると考えられるからである。

西洋における大学の発展史を振り返ると、11-13世紀において中世大学の代表と見なせる学生自治団型のボローニヤ大学や教師組合型のパリ大学などが発展し、その後のヨーロッパにおける大学の模範となったことは周知の通

りである。そこでは司祭や法律家、医者の養成をめざす高度の職業学部 (Professional School) である神学部・法学部・医学部の専門学部が重きをなしていたが、その前段階の一般教育として「自由七学科」と称される基礎学が重視され、教えられていた。それらはプラトン哲学系三科 [論理学, 文法学, 弁証 (修辭) 学] とアリストテレス系四科 [算術, 幾何, 天文, 音楽理論] であったと言われている (池田, 1973 年 a,b. ヴェルジュ, 1991 年)。

学問諸分野のほぼ全域をカバーする総合大学が姿を現してくるのは近世ドイツの大学においてである (潮木, 1973 年)。そこでは法学・医学などの職業学部・専門学部以外での学問研究や教育は「自由学部」や「学芸学部」(Artes Liberales, Liberal Arts Faculty), または「哲学部」(Faculty of Philosophy) として行われた。これが、今日でいう教養学部 (学科) の原型であると考えられる。この教養教育においては、今日における理系文系にわたる基礎学問を、つまり論理学や語学, 古典, 音楽などの芸術, そして数学や天文学などが研究教育されていたのであり, それら諸学を幅広く学ぶことが「教養」という意味であった。従って, 教養諸学を称して英語では Liberal Arts, Liberal Arts and Sciences などと表記されるようになり, 今日まで継承されている。

哲学者カントが, その大学論で「哲学部」が大学の中心におかれるべきであると主張したことはよく知られているが, それは将来に専門的な研究を目指す者も含めて, まずこれらの教養諸学を身につけて人格を陶冶し, 豊かな知識と常識, 物事を論理的にかつ経験的に判断する能力を身につけることが必要不可欠であるという認識からであった。Ph.D という学位が, 人文学から自然科学にいたる全領域で授与されていた理由もここにある。

近代日本の大学も西洋流の大学論に立脚して設立されたが, 「教養教育」をカントのいうように全学問の基礎として明確にすえ, 入学生全員が最初に所属して, それを学ぶ独立した学部として「教養学部」を設置したのは, 東京大学教養学部 (College of Arts and Sciences) である。それは 1949 年 5 月 31 日, 新制東京大学の発足と同時に設立された。全国の多くの国立大学がいわゆる「教養部」を置いたのに対して東京大学だけは当初から独立の学部とし, 初

代学部長の矢内原忠雄を中心として新しい教育理念を掲げた学部の礎石が据えられた。矢内原氏は、その理念を「ここで部分的専門的な知識の基礎である一般教養を身につけ、人間として偏らない知識をもち、またどこまでも伸びていく真理探求の精神を植え付けなければならない。その精神こそ教養学部の生命である」と語っている。

私学で、同様の立場から「教養学部」(College of Liberal Arts)を独立させて、全学の基礎としているのは国際基督教大学である。

しかし、この教養学部または教養学科という独立した学部学科の設置は、あまり普及しなかった。その理由の一つは、専門の諸学部との間に一種の「差別」問題が起こったからであると思われる。専門学部の教員は研究者としてより優れており、教養学部の教員はいわゆる「教育教員」であって研究者ではないという差別意識や優越意識の確執が生じたからである。その結果、教養学部の教員は、できるなら専門諸学部に移籍したいと願い、本来の教養教育に情熱を注ぐことが少なくなった。そこで多くの大学では、教員所属は専門の諸学部置き、教養教育は「教養科目群」としてカリキュラム上において専門諸学部の教員が担当するか、学部ごとに「教養科目」において教育する方向に傾斜していった。前者は教養科目担当の教員の負担が増えることと、教養担当というレッテルを貼られるという欠点があり、後者はタコツボ型教育に陥りがちであるという欠点があった。

創価大学の現行カリキュラムにおける「共通科目」群は前者であり、各学部の基礎科目は後者なので、混合型と言えそうである。

いずれにせよ、本稿の課題である近年の人間学諸学部の展開との関連に議論を戻すと、「総合科学部」「総合人間学部」などのような「総合」を冠している学部の構想には、従来の「教養学部」の欠点であった「専門教育の前段階」としての教養教育という低い評価と、細分化した学問によるタコツボ型教育という弊害を克服した形の「新たな教養教育」の機能も併せ持たせていこうという意図があると考えられる。この教養教育との連動という観点は、広島大学総合科学部においては、ホームページでの以下の記載のように、明確に

意識されているようである。

「総合科学」は、個々の専門分野を深化させるとともに、その融合・協同（コラボレーション）を實踐して、新しい知を開拓する学問領域です。新研究科の設立で、教養教育から大学院教育までの一貫した「総合科学」の学舎が完成します（下線は筆者）。

本研究科の教育課程は、多様な専門分野を誇るスタッフを背景に、既存の学問的枠組みのブレークスルーと新領域の創成に取り組むことで、自己の専門分野を「重点的」に研究して専門的な知識・技能を高めると同時に、学際性・総合性・創造性に秀でた「総合科学」の知的技法を身に付け、その到達点を、学際的・総合的な観点から客観的に評価できるジェネラリスト（「重点的ジェネラリスト」と呼びます）の養成をめざします。

(2) 教養教育との関係では、「文学部」という学部のあり方についても再考察しておく必要があると思われる。日本の大学における「文学部」は、ある意味で特殊な存在である。文学部といえども狭い意味での「文学」(literature)を研究する学部ではなく、文学に顕著に表れる人間精神の探求、すなわち文学・芸術・宗教・哲学・歴史学を含む人文学 (Humanities) を探求する学部という意味である。また、「文」という字には「研究する」「文する(もんずる)」という意味がある。「天文学」が天体を研究する学問を指すように、「人文学」は人間を研究する学問を指す。それ故、社会科学を含む人間精神の所産 (arts) を研究する学問全体を指す人文科学を修する学部としての(広義の)人文学部という用法と、哲学・史学・文学という三つの部門を持つ狭い意味での文学部という二つの用法があるという(Wikipedia「文学部」参照)。また近代以前に神学などから分岐して発展してきた「科学」も、真理を探究する新しい技法 (arts) だったのであり、その結果、哲学という学問に「科学」や「理学」も含まれて発達してきたという歴史的経緯もある。従って、社会科学に区分される心理学や社会学等が文学部内に存在する事例が少なくない。

となるとカントの大学論における「哲学部」も広い意味での「文学部」の

一原型であったと考えられ、諸学の基礎と総合的知識の教育と人格の陶冶を目指す「教養教育」という要素もが「文学部」に入ってきていることも容易に理解できる。実際の多くの「文学部」は、古典学、近現代文学、歴史学や哲学などの「専門的研究」と、上記の広い科目に基づく「教養教育」の機能が併存し、研究と教育の両方の機能を併せ持っている特殊な学部として発展してきたと言えよう。

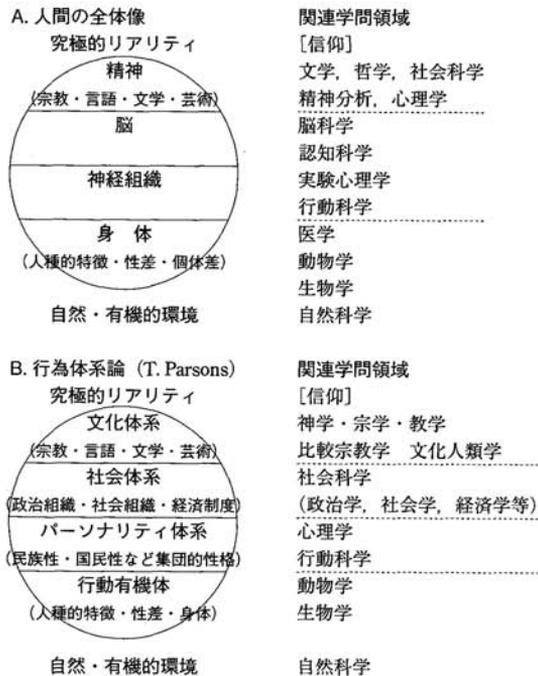
文学部の教員は、実際に教養科目（本学では「共通科目」）の多くを担当している。従って、語学や基礎・入門科目の担当者を多く含み、いわゆる専門研究者との緊張を孕んでいるのも事実である。また文学部は、デジタル化された情報が氾濫し、迅速性や効率性、有用性が求められる現代社会にあっては「無用の長物」と見なされる傾向がなきにしもあらずである。

しかし、大学教育が専門学校等と異なる最大の存在理由は、当面の有効性や有益性、つまり実学の訓練にあるのではない。むしろ実学の前提ともなる「論理的思考」や「科学的・合理的思考」を身につける「精神の鍛錬」の場として、さらに異文化や他者を理解し、人間としてより善き生き方を模索する「人格の陶冶」をはかる場であることにある。時代のニーズに合わせるだけでなく、また社会が効率性と有用性のみを求めている時代であるからこそ、人格や教養を育ませる基本学部としての「文学部」が大切となってくると言えよう。総合科学や人間科学の学部学科を設置した諸大学においても、多くは「文学部」を残してあるのも、その故であると考えられる。また、いわゆる応用・学際的な先端学部を時代に合わせて作るにしても、古典や文学、歴史学や哲学などの伝統的な学問と教育を、時代を超えて担う「文学部」を擁することは、大学の本来の伝統や格式を示すものでもあろう。

本学が、創立の理念に示されるような高邁な理想を探求していく総合大学として、「文学部」は将来規模を縮小し、古典などの専門分野の研究に限定したものとしても、存続させていくことが大切であると考ええる。

## むすび

現代における人間学は、以上の考察から、理系を含む諸学問の総合的学際的な研究と教育を探求する場と考えることが妥当であり、必要であると言えそうである。下図は、日頃の講義などで提示しているものであるが、Aは、個体としての人間を対象にした場合の人間の諸領域と、その各領域の探求に必要な諸学問との関連を示したものである。Bは、複数の人間個人が織りなす相互行為のシステムと関連諸学を示したものである。



行為体系論は、アメリカの社会学者タルコット・パーソンズが包括的な社会体系論を構想した際の理論的枠組みである (パーソンズ, 1971年, 第2章)。彼はかつてハーバード大学で社会関係学部を立ち上げ、当時としての総合科

学の必要性和体系を構想した。やや壮大すぎる理論と評されたこともあるが、現在の総合人間学にも通じる発想ではないかと考えられる。

本学が現時点で人間学という名称を冠した学部などを設立する場合を考えると、これまで記した内容を十分考慮に入れなければならないと言えよう。幸いなことに、本学では工学部において人工知能や遺伝子工学の研究も進んでおり、それらを取り入れた、または連携した改革も可能である。

また本学の建学の精神や創立者の教育構想「人間教育による全人的人材、全本人間の育成という理念」に立脚し、「大学教育は高度な知識の獲得、明晰な知恵の啓発そして人間性豊かな人格の形成をはかることを目的とするが、その中核をなすのが教養教育である。教養とは、人格を陶冶し、知力を磨き上げる土台である。」との本学教育ヴィジョン等をもとに考えると、新たな文化建設の揺籃たることをめざし、人間および人間文化全体への総合的な探求と教育をめざすという教養教育の要素も必要であろう。

大学教育や大学の歴史を専門としているわけでもない筆者であるが、常日頃つらつら考えている点を記してみた。人間学を構想していく際の、参考になれば幸いである。文中には誤解や間違いもあろうと思えるので、ご専門の先生方に今後ご教示願いたいと希望している。

#### 【参考資料・文献】

- 阿部謹也, 1999年, 『大学論』日本エディターズスクール。
- 池田大作, 1973年a「創造的人間たれ」, 1973年b「スコラ哲学と現代文明」, 創価大学創価教育研究所編『創立の精神を学ぶ』2007年, 所収。
- ウイルソン, ブライアン・R・「現代社会における大学の役割—21世紀の大学像をめぐって—」(創価大学社会学会講演会, 1997年11月26日), 『創価大学ニュース17号』1998年4月1日発行所収(以下のウェブサイトにも掲載 <http://wilson.seesaa.net/category/200786-1.html>)。
- 潮木守一, 1973年『近代大学の形成と変容』東京大学出版会。
- 同, 2008年『フンボルト理念の終焉?—現代大学の新たな次元』東信堂。
- ヴェルジュ, ジャック, 1991年『中世の大学』みすず書房。
- 小川百合, 2004年『英国オックスフォードで学ぶということ』講談社。
- 島田雄次郎, 1967年『ヨーロッパ大学史研究』未来社。

パーソンズ, タルコット, 1971年, 『社会類型—進化と比較—』至誠堂。

ブルーム, アラン, 1990年『アメリカン・マインドの終焉』みすず書房。

ホフスタッター, リチャード, 1980年『学問の自由の歴史』東京大学出版会。

ルーベンスティン, リチャード, 2008年『中世の覚醒—アリストテレス再発見から知の革命へ』紀伊國屋書店。

横尾壯英, 1992年『中世大学都市への旅』(朝日選書 453) 朝日新聞社。

引用した各大学の学部学科のウェブサイト。